

研究者の脱中立と変容： LGBT 活動を取り巻く人々の対立構造に巻き込まれた私たち The deneutralization and transformation of researchers: Being involved in the conflict among those around LGBT activism

宮尻 琴実, 坂井田 瑠衣
Kotomi Miyajiri, Rui Sakaida

公立はこだて未来大学
Future University Hakodate
miyajiri.kotomi@gmail.com

概要

本稿では、『認知科学』への投稿論文執筆を含む、LGBT 活動に連帯しない当事者を対象とした研究を行っているなかでおきた、著者自身の価値観や立場の変化を自己再帰的に記述し考察する。対象者の実践に対して中立的な見方をしてきた研究者が、いかにして脱中立的な見方をし、その実践のなかにある対立構造に巻き込まれていったのかについて、対象者とのかかわりの変化や査読者、担当編集委員とのやりとりをふまえながら論じる。

キーワード：エスノグラフィ (ethnography), 二人称的かかわり (second-person approach), エスノメソドロジー (ethnomethodology)

1. はじめに

私 (第一著者) は、LGBT 活動に批判的な発言をする当事者の研究に従事してきた。そのなかで、『認知科学』の特集「価値に向き合う認知科学：対話・身体・記述」に向け、研究論文「「ホモ」をめぐる闘争：LGBT 活動に連帯しない当事者のカテゴリ使用」を第二著者とともに執筆した (宮尻・坂井田, 2024)。この論文では、「ホモ」という男性同性愛者を表すカテゴリをめぐる「価値の交渉の現場」 (新原他, 2024) を、LGBT 活動とそれに連帯しない当事者である A さんの政治的立場の対立構造として記述し、考察した。こうした LGBT 活動と A さんの対立構造に関する記述は、研究対象である A さんに対する私のかかわりの変化や、査読者や担当編集委員とのやりとりによって、著者らの価値観や捉え方が変化したことで可能になったものである。そこで、本稿では、当該論文執筆中を含む、LGBT 活動を批判する当事者を対象とした研究を行っているなかでおきた、私と対象者とのかかわりの変化を自己再帰的に記述し、「一人称的/二人称的/三人称的かかわり」 (Reddy, 2008 佐伯訳 2015; 佐伯, 2017) の視点から考察する。

2. 研究を始めた動機

私は幼少期から女性らしい服装を拒絶したり、中学生の頃は度々提出を求められる書類の性別欄で「女」に丸をつけることに抵抗感があつたりと、自身が女性であることに違和感を抱いていた。高校生・大学生では、自身のセクシャリティを模索するために、「LGBT」やそれ以外の性カテゴリの知見を深め、当事者のインタビュー記事を閲覧していた。ある記事のなかで、当事者が自己のセクシャリティを明らかにするために、複数の性カテゴリを自身に当てはめていることに違和感を抱いたことで、私は「セクシャリティは一人一人異なる」ならば特定の性カテゴリに自己を当てはめる必要はないと考えるようになった。

そして、卒業研究でセクシャルマイノリティに関する何らかの研究をしたいと考えていた私は、当事者が自身のセクシャリティを、「LGBT」といった既存の性カテゴリを当てはめながら模索していることに違和感を抱いていることを指導教員である第二著者に伝えたところ、セクシャリティを、性カテゴリを用いて細分化する当事者にとっての意味はなにかという大きな問いが立った。その頃、私は「性カテゴリは不要である」というイデオロギーから、「LGBT」といった性カテゴリを用いることを前提とした LGBT 活動を推進する活動家を嫌悪するようになっていった。こうした背景から、私は、LGBT 活動に連帯しない当事者を対象に、それらの当事者のカテゴリ使用からその実態に迫る研究に着手することにした。

3. 研究対象者と私のかかわり

LGBT 活動に連帯しない当事者として、A さんと B さんの 2 人の当事者を Twitter (現 X) 上で見つけた。A さんは自身を「ホモ」「ゲイ」と称し、B さんはそれ

らに加えて「オカマ」と称していた。手順として、はじめに A さんの分析を、その次に B さんの分析をした。

分析を始めた当初、私は『認知科学』の論文中で分析対象とした A さんの発言を[屁理屈]として受け止め、B さんの発言は[癩に障る]と感じており、それぞれの当事者に対して否定的な感情を抱いていた（[] 内は当時の記述からの引用）。しかし、A さんの分析を進めるために過去の投稿を遡っていると、A さんが発言によって自身を表現するときに「ホモ」と「ゲイ」を使い分けていることに気づき、そこに何らかの意図があると感じるようになった。これによって、私は A さん自身に興味を湧き始め、A さんの発言に耳を傾けるようになる。そこには、B さんの存在が大きく影響している。当時私は、LGBT 活動を推進する活動家を嫌悪していたことから、B さんの発言の内容から活動家的な側面を拾い上げ、徐々に B さんと距離をとるようになる。そして、B さんと相対するように、活動家的側面を感じない A さんを徐々に自身と重ねるようになり、学会発表等の質疑応答の場では、A さんの気持ちを代弁するように自身の意見を述べていた。

このように A さんを私自身と同化させるようになっていたが、さらに A さんの分析を進めていったことで、私は A さんとの差異を見出すようになる。これまで私は自身のセクシャリティを他者に向けて表明することは一度もなかった。そのため、LGBT 活動に対して批判的ではあったが、自身のセクシャリティをカミングアウトしながら LGBT 活動への批判的発言をすることに否定的であった。よって、私はそれらの活動に参加することを避けるために、LGBT 活動に[連帯しない人の片棒は別にかつぎたくない]と、Twitter 上で LGBT 活動に対して批判的な発言をする A さんと自身を分離させるようになった。また、そうしたなかで自身の当事者としての立ち位置を、「変化を求めない一人」の当事者として位置づけていた。

4. 論文執筆のプロセスにおける苦悩

その頃、『認知科学』の特集「価値に向き合う認知科学：対話・身体・記述」に掲載される論文の募集が始まり、その投稿に向け A さんの分析を進めていた。A さんに自身を同化させることから脱却したことで、私は A さんを私と切り離された存在としてみなし、A さんが「ホモ」を用いなければいけない A さんにとっての「事情」を A さんの発言から読み解こうとしていた。

第一稿の論文では、A さんの「ホモ」を用いた実践を、「一般的に」差別語として扱われている「ホモ」と対比させながら、分析・考察を行った。論文を投稿した約一か月後半に、一回目の査読結果が返ってきた。いくつかの指摘のなかでも重要なものとして、「ホモ」が「一般的に」差別的意味合いをもつという記述に論拠はあるのかという指摘があった。「ホモ」が「一般的に」差別語であるという認識は、私個人の経験のなかで得られた知識にもとづくものであり、その用法が広く認知されていることを確かめることはできないことから、修正論文では「一般的に」という文言を無くし、新たに構成を練り直した。また、その指摘と関連して、論文中で結論づけた主張は妥当ではないのではないのかという指摘もあったことから、第二著者と度重なる議論を行い、第二稿では A さんの「ゲイ」の用法と「ホモ」の用法を対比して新たに分析を行った。

三か月後、二回目の査読結果が返ってきた。そこでは、査読者から論文の核となる議論について重要な指摘がなされた。それらの指摘について、担当編集委員から「LGBT 活動と A さんはそれぞれなにを目指しているのか」「そこにどのような社会的正義があるのか」「それぞれの社会正義に対して本論文がいかに関与しているのか」という、本論文の政治的立ち位置を明確化してはどうかというアドバイスであると解釈しました」という補足があり、それを参考に修正を行った。これまでの第一稿や第二稿では、A さんが「ホモ」というカテゴリーにいかに関与を見出したのかを、A さんの実践をみることによって明らかにしようとしていた。けれども、そこには A さんと LGBT 活動のそれぞれが志向する政治的立場や社会的正義があることを指摘されたことで、それらを手がかりに、私は A さんの「ホモ」をめぐる実践だけでなく、LGBT 活動の「ホモ」をめぐる実践について、考えるようになった。まずは、LGBT 活動の目指しているものや社会的正義について、[すべての人の人権は平等に保障されるべきものである]という LGBT 活動が目指していることを切り口に、「LGBT」という性カテゴリーの枠組みを用いることの、LGBT 活動にとっての必要性について考察した。次に A さんについては、一つ一つの投稿から A さんがどういった正義のもとで発言をしていたのか精査し、それがすべてのデータ内で矛盾なく言えるものであるのか確かめる作業を繰り返し行った。特に A さんの分析では、A さんの発言のなかから、画一的な社会的正義を導き出すことが非常に困難であり、様々な仮説を立てて試行錯誤しな

がら考察した。

このように、A さんだけでなく LGBT 活動の政治的立場や社会的正義を考えるようになったことで、LGBT 活動には「LGBT」という枠組みを用いなければならない LGBT 活動にとっての合理性があることを理解し、これまで敵対する存在としてみなしてきた LGBT 活動が抱えもつ「事情」に耳を傾けるようになった。A さんと LGBT 活動の双方が抱えもつ「事情」があることを知ったことで、「ホモ」をめぐって A さんと LGBT 活動が対立する政治的立場を志向していることを論じることができた。

5. 考察

研究当事者とのかかわりの変化による脱中立化

佐伯 (2017) は、ヒトとヒトのかかわり方について、Reddy (2008 佐伯訳 2015) の「一人称的かかわり」、「二人称的かかわり」、「三人称的かかわり」を用いて説明している。「一人称的かかわり」とは、「対象を「ワタシ」と同じような存在とみなす」かかわり方であり、「三人称的かかわり」は、「対象を「ワタシ」と切り離して、個人とは無関係な存在とみなす」かかわり方である。「二人称的かかわり」とは、「対象を「ワタシ」とは切り離さない、親密に関わる存在とみなす」かかわり方である。佐伯 (2017) は、対象を「人間としてみる」ことを大前提とし、そのうえで、表面に現れている欲求や感情の奥にある「訴え」を聴こうとしながらかかわることで、二人称的かかわりになると述べている。

これを参考に、これまでの A さんや B さん、LGBT 活動と私のかかわり方を考察する。まず当初、私は A さんや B さんに対して、LGBT 活動に対する批判的な「思い」や「情感」が込められた発言を「屁理屈」といった煩わしいものとして扱っていた。よってこの時、私は A さんや B さんに、自己とは無関係な三人称的存在としてかかわっていた。けれども、分析で A さんの投稿を遡っていくうちに、A さんが「ホモ」と「ゲイ」を使い分けていることに気づいたことで A さんとのかかわりが変化した。私は、A さんが「ホモ」と「ゲイ」を使い分けるその意図を、A さんの発言にこめられた LGBT 活動に対する「訴え」から読み解こうとする姿勢をとるようになる。私はそうした A さんに対する二人称的なまなざしをもちつつあったが、分析を進めるうちに距離を置くようになった B さんの存在によって A さんと私自身との距離が縮まり、私は A さんを自己と

同等な存在とみなし、一人称的にかかわるようになる。しかし、A さんと自身を同化させたことによって、私は A さんと自身の LGBT 活動に連帯しない当事者としての考え方の違いを見つけ出し、次第に自己から A さんを切り離すようになる。そして、A さんの実践をより緻密に分析したことで、A さんが抱えもつ固有の「事情」や LGBT 活動に対する「訴え」に耳を傾けるようになる。つまりここで私は、A さんと二人称的にかかわりをもつようになったのである。

このように、A さんや B さんの分析を進めるなかで、A さんと私のかかわりは、三人称、一人称、二人称的にかかわりへと変化していた。二人称的にかかわりができたことよって、「ホモ」を用いた A さんの実践を、A さんが置かれている状況、つまり A さんが「対峙する世界」(石岡, 2016) をみることで理解しようとしていた。そして、『認知科学』に投稿する論文について査読者や担当編集委員とのやりとりをしたことによって、二人称的にかかわりのまなざしは LGBT 活動にも向けられるようになる。

論文の第一稿では、「ホモ」を差別語として扱う「一般的な」用法と、非差別語として扱っている A さんの用法を対比させながら分析をしていた。その語の用法が広く認知されている様子を意味する「一般性」を志向する立場では、どこか特定の立場に属した見方でなく物事に対して中立的な見方を志向することとなる。よって、第一稿では、著者は特定の立場に立っておらず、中立的な見方から A さんの実践を記述しようとしていた。しかし、二回目の査読結果で、LGBT 活動や A さんが「それぞれなにを目指し」、「そこにどのような社会的正義があるのか」明らかにし、「本論文の政治的立ち位置を明確化してはどうか」と提案を受けたことで、LGBT 活動と A さんの政治的立場を、それぞれが目指しているものや社会的正義から推察するようになった。これにより、これまでより一層、A さんの発言の奥にある「訴え」や A さんを取り巻く「事情」を読み解こうと、A さんとのあいだに構築されていた二人称的にかかわりがより強固になり、そうしたかかわりは LGBT 活動とのあいだにも構築されるようになる。研究に着手した当初、私は「LGBT」といった性カテゴリーは不要だと考えていたが、性カテゴリーを用いることの利点を改めて認識したことで、LGBT 活動が「LGBT」といった性カテゴリーを用いなければならない「事情」があることに気がついた。つまり、査読者や担当編集委員とのやりとりによって、A さんと LGBT 活動のそれぞ

れに対して二人称的かかわりをもつ存在として自らを位置づけた。それによって、A さんの実践に対して中立的な見方を脱し、A さんと LGBT 活動の双方が抱えもつ「事情」を理解し、それぞれが異なる政治的立場にあることを記述することができた。

脱中立化を可能にしたもの

このように、私自身が抱えるアイデンティティや私と A さん・B さんとのかかわり方、そして、第二著者や査読者・担当編集委員といった他者とのあいだで繰り返し行われたやりとりによって、ある一人の当事者のカテゴリー実践を理解しようとした研究が、A さんと LGBT 活動の対立構造を理解するものへと変化した。こうした、本研究を通しておきた研究者の脱中立化は、A さんと LGBT 活動のそれぞれが置かれているフィールドでの実践に内側から深くコミットした記述を積み重ねた研究手法を用いたことで可能になった。

本研究は、A さんに直接インタビューを行ったり、LGBT 活動を推進している団体への参与観察などを行って調査した研究ではなく、Twitter (現 X) 上での A さんの投稿をもとに、A さんのカテゴリー使用についてエスノメソドロジー的観点から分析を行った。エスノメソドロジーでは、様々な実践においてそこで行われている「人々の方法論」を解明することが目的とされる。おしゃべりや、授業を受けるといった人びとが行う様々な日常的な出来事は、秩序だった方法で行われており、それらは「説明可能 (アカウンタブル)」なものと考えられている。例えば、道で立ち止まり視線を左右におくっている人を見て「道路を渡ろうとしている」と言えるのには、その場の状況とその行為を、「道を渡る時は左右を確認する」といった行為者だけでなく分析者にも共有されている規範に照らし合わせることで理解できる (水川, 2007)。

本研究でも、A さんの「ホモ」を用いた実践が、いかに秩序だった実践であるかを「説明」するために、論文を投稿した第一稿では、「ホモ」を差別語として扱う「一般的な用法」を手がかりとし、そこからの逸脱として分析を進めようとした。しかし、A さんの実践は、A さんの事情を汲み取らなければ分からない規範のもと、行われていた実践であった。そのため、「ホモは差別語」という「一般性」を志向した規範のもとでは、A さんの実践は自嘲行為としてしか記述できない。実際の A さんの投稿では「はっきりいっておく、ホモのオレはレズやトランスジェンダーと LGBT だのといって連帯する

つもりは、これっぽっちもない。」というように、自嘲ではない、「ホモ」という立場を取ることに對する何らかの強い意志が読み取れた。そこで、本研究では分析者も共有されている規範ではなく、分析者に共有されていない A さんの規範を知ることをつうじて、A さんが「ホモ」を用いることの合理性を明らかにした。A さん独自の規範を理解するためには、A さんと分析者である私のあいだに構築された二人称的かかわりが欠かせなかつたらう。A さんの規範を明らかにするために、本研究では A さんの「ホモ」に結びつけられた規範的な述部 (Hester & Eglin, 1997) を手がかりに分析した。それによって、A さんがもつ規範が少しずつ読み解かれ、A さんの事情をより知る者として二人称的かかわりが構築された。そして、二人称的かかわりができたことによって、A さんという固有の当事者がもつ規範について明らかにし、A さんの実践を「説明可能」なものとして記述することができた。つまり、A さんの「ホモ」という実践にある秩序だった方法を、A さんと私とのあいだに構築された二人称的かかわりによって導かれた A さんの規範をもとに明らかにしたことによって、「一般的」という中立的な見方から脱却し、A さんと LGBT 活動の対立構造を見出すことが可能になった。そして、著者らはそうした対立構造に巻き込まれていったのである。

文献

- Hester, S., & Eglin, P. (1997). Membership categorization analysis: An introduction. In S. Hester, & P. Eglin (Eds.), *Culture in action: Studies in membership categorization analysis* (pp. 1–23). University Press of America.
- 石岡 丈昇 (2016). 参与観察 岸 政彦・石岡 丈昇・丸山 里美 (著) 質的社会調査の方法 他者の合理性の理解社会学 (pp.95-153) 有斐閣ストゥディア
- 宮尻 琴実・坂井田 瑠衣 (2024). 「ホモ」をめぐる闘争: LGBT 活動に連帯しない当事者のカテゴリー使用 認知科学, 31, (4), 627-639. <https://doi.org/10.11225/cs.2024.050>
- 水川 喜文 (2007). エスノメソドロジーのアイデア 前田 泰樹・水川 喜文・岡田 光弘 (編) エスノメソドロジー: 人びとの実践から学ぶ (pp. 3-34) 新曜社
- Reddy, V. (2008). *How infants know minds*. Harvard University Press. (レディ, V. 佐伯 胖(訳) (2015). 驚くべき乳幼児の心の世界: 「二人称的アプローチ」から見えてくること ミネルヴァ書房)
- 佐伯 胖 (2017). 「二人称的アプローチ」入門 佐伯 胖 (編著) 「子どもがケアする世界」をケアする (pp.33-78) ミネルヴァ書房
- 新原 将義・伊藤 崇・青山 征彦 (2024). 特集「価値に向き合う認知科学: 対話・身体・記述」編集にあたって 認知科学, 31(3), 439-442. <https://doi.org/10.11225/cs.2024.030>